

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十九年十二月一日発行（毎月一回一日発行）
第十四卷第八号（通巻第一六四号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第164号

12. 2007

金メダル

品川鈴子

下野の牛膝いのこずち付く句碑探し

鏡板の剥落しる著し新松しんちじり子

離宮池刷く羽毛筆か猫じやらし

離宮棲み首を竦すくめぬ穴惑ひ



伊吹嶺を忽ち匿す霧襖

米原駅界限こぞり晩^{おく}稻刈る

袴着に巫女掛けくれる金メダル

七五三牛像撫でる眼鏡つ児

落葉掃く役にふたたびビル勤め

鴉の声漏るぎつしりと朱の鳥居



玉鈴吟

愛媛 今井 忍

手足垂れベンチに眠る登山装
水中花揺らし小遣ひねだりをり
城攻めか大発生の蟬シャーシャー
選句披講台風近きこと忘れ
白玉を冷やして母の忌なりけり

大阪 今谷 脩

朝日浴び夕顔の実を抱へ来る
雲の峰甲子園の土詰めて去る
いのちなが明治生れの生身魂
天皇の御名諦してわが文化の日
黄落や安土に残る大手道

香川 齋部 千里

籠の虫夜は野の虫と鳴き交す
畦道をくれない染むる彼岸花
ゴンドラの中で鳴き出す籠の虫
曼珠沙華峡田の奥まで紅の畦
鳴たける己が全身ふるわせて

兵庫 浮田 胤子

谷底で柿どんぐりと出合ひたり
生れきし仔馬も走る襟裳岬
旅はじめ白夜のようなニューデリー
出目金に黒・白・朱のまだらあり
婚の秋庭の燈籠みな点し

兵庫 馬越 幸子

涙腺の弛む唱歌よ敬老日
切せつと慕情唄ひて敬老日
洗ひたる墓石芯まで灼けてをり
白無垢の木槿は床に朝茶の湯
松風も村雨もぬし月の宴

大阪 大井 邦子

草取を副業として寺男
砂利を踏む音も重たく秋じめり
桃もたぐ幼両手に深えくぼ
稲の花市電の聞こゆる神田に
夫婦箸新に替へて吉野の忌

東京 大川富美子

申しわけほどの髪をば洗ひけり
老いの身の昂る日あり雁来紅
青梅を匂に案ずれば数の増え
海霧が動く市場に胴間声
ながき夜の伸びやすきもの老の爪

香川 大空純子

水切りの勢い霧へ岩の音
告白日雨に落ちつく稲埃
励ましの手紙を貰い扇置く
新米をお代り娘堂堂と
稲刈はいつもの古着サラリーマン

兵庫 岡 有志

花木権わが退院を待たで咲く
母が待つ日々のさざなみ今朝の秋
秋暑し頭に挙げてゐる子猫の手
新涼の一步一步の歩幅増す
燈下親しドイッ行進曲かかる

埼玉 岡田章子

境内の神饌田の稲穂頭垂る
見上げゐる銀杏の巨乳青実つく
もの間へば若き作務僧眉涼し
品川宿海苔屋に西日溢るほど
竜の髭白雄の墓を押し上ぐる

大阪 岡本 幸枝

大理石結跏趺坐してなお涼し
夏霧の天保山は真下らし
朝風の波止のトレーラー無人なり
カーニバル四通八達蟻走る
夏芝のバージンロード張替中

大阪 奥田 妙子

打衣の裾を引きつゝ乞巧奠
乞巧奠了へれば小雨慌し
盆休み声変りして帰国の子
帰国子を送り出したり秋の声
鈴虫は低めの音に鳴き始む

兵庫 勝野 薫

束ね髪独り花野にホルン吹く
会釈して水打つ老女に母重ね
尾を立ててすり寄る猫よ夕端居
秋渴^{かは}き避妊手術の猫絶食
三代の猫どもごろ寝柚子は黄に

兵庫 加藤 奈那

世話役の大きなリュック山登り
下り来し山に一礼夏帽子
呼べど呼べど月の山ゆく後影
新涼の明日着る喪服吊しけり
喪の服をたたみて遠く雁のこゑ

薬草歳時記

(一六三) オモト (万年青)

大音悦子

万年青の実蝸^{かろ}盧の年浪流れけり

飯田 蛇笏

オモトはおめでたい植物として新築祝や誕生祝などに用いられますが、これは中国の故事にならったものでオモトのもつ生命力にあやかっただものといわれています。徳川家康が江戸城入城のとき、三河から贈られた斑入りオモト三鉢を携えたということです。オモトの葉の濃い緑色は、無地一色なのに静かな強さのようなものが感じられます。

オモトの品種は非常に多く、縞模様や斑入りなど様々ですが、地色の緑色が生きた色でないとい価値がないそうです。自生のオモトは太平洋側では宮城県、日本海側では能登半島を北限として沖繩まで見られます。強い光線を長時間必要とせず、木陰の下など涼しいところに生え、20〜25位が生育の適温です。

鉢植えのものは冬の管理が大切です。寒風があたると蒸散作用で脱水症状をおこし葉が茶色になる葉やけをおこし見苦しくなります。又高温にし過ぎると芋(地下茎)が軟

弱になり、春からの成長に影響します。

オモトの葉は3年位が限度でやがて枯れます。4年目になると落葉した部分が芋(地下茎)になり、新しい生命の誕生のもとが作られます。

薬用部分は根茎(万年青根)と葉(万年青葉)で根茎と葉に強心配糖体のロデイン、ロデニン、ロデキシンA・B・C・D、ロデアトキシシン、ステロイド系サポニンのロデアサポニンなどを含みます。ロデインはウサギ・ネコに対し呼吸運動を初め亢進し、後に緩徐にします。又ジギトキシシン類似の心臓の収縮機能、発生機能、伝導機能を刺激し迷走神経に作用して、心臓の搏動振幅、周期を変化させ循環障害を起こすことにより、運動麻痺、全身痙れんを起こし死亡します。血管・血圧・血液分布に及ぼす作用もジギトキシシン類似であり、内臓の平滑筋に対しては筋収縮をおこさせ延髄の諸中枢を亢奮させ運動神経繊維、骨格筋を麻痺させます。中毒症状は悪心、頭痛、不整脈、血圧低下などで全身痙れんを起こし死亡します。万年青根は強心薬ですが毒性が強く、家庭では絶対に用いてはならないとされています。

万年青根〈性味〉苦・寒〈帰経〉肺経

万年青葉〈性味〉苦・微寒〈帰経〉腎経・肺経

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

「NHK趣味の園芸オモト」NHK出版

「中薬大辞典」

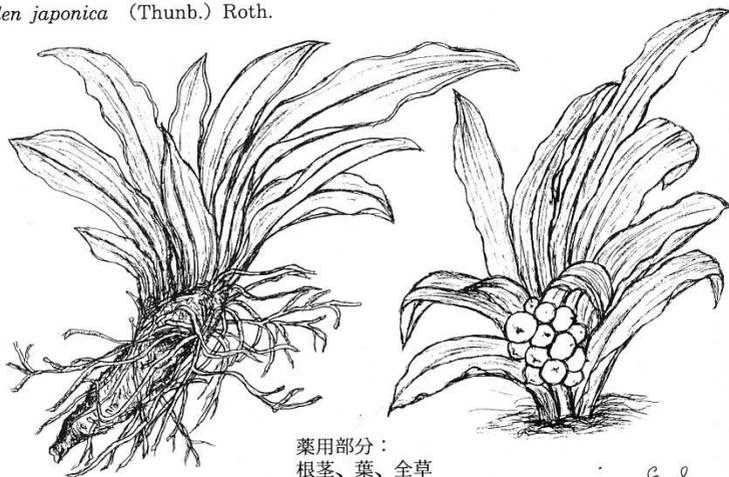
小学館

著者略歴 神戸薬科大学卒

オモト〔オモト属〕(ゆり科) 万年青

Rohden japonica (Thunb.) Roth.

須賀
悦子
画



薬用部分：
根茎、葉、全草

E.S.

草の葉の岩にとりあふ老母草哉

上島 鬼貫

花の時は気づかざりしが老母草の実

黒柳 召波

塵筥に實を数へたる老母草哉

馬場 存義

実をもちて鉢の万年青の威勢よく

杉田 久女

万年青の実生涯新たななる一步

野澤 節子

万年青の実父を敬ふ日なりけり

宮下 翠舟

この年は旅を奢りぬ万年青の実

上里 千石

火礮の甕を支へて万年青の実

品川 鈴子

万年青の実家康の城残りたり

須賀 悦子

新居にはカーテンつりて万年青置く

池田 久恵

(ぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

噴水の仕切り直して丈くらべ 香川 横内かよこ

水中花踊り続ける赤い靴

特急に幾度越されし夏の旅

帰省子も明日は都の人となる

月蝕の宴となりたり缶ビール

向ひ家の若き抱擁青すだれ

揚花火弾丸の跡ある蔵の壁

満員のバスを乗り継ぎひでり畑

吹奏楽盆も休まず一途なる

稲妻の度に目を閉じ南無阿弥陀

みぎひだり寝返りつづく熱帯夜

厄日なることも忘れてシヨッピンダ

優先席目でゆづり合ふ敬老日

新居得し丹波平野は稲の花

稲を刈る課外授業の子ら嬉々と

藤椅子に仰け反る猫の面がまへ

仏前の狭さ気にせずカサブランカ

東京 松本 アイ

兵庫 村田とくみ

兵庫 林 美智

兵庫 森山八重子

蚊帳たゝむ自信の腕は租仕込み

遠雷におびえる猫とにらめっこ

人去りて家こわされて草茂る

涼しさの隠れてゐたり酒造蔵

一杯の水のもてなし夏遍路

外されて汗ばみ重き黒真珠

瓦屋の廃業久し草の花

野路菊やダム湖に消ゆる工事道

青蜜柑句座に暫しの静寂あり

泣き相撲こしき甌岩までとどかざる

露草の色を集めし江戸の絵師

駅の名は青物横丁蝉しぐれ

秋つばめ品川宿を旅立ちぬ

秋あつし見当らぬ句碑さがす街

コーヒーの香る小窓や酔芙蓉

秋天にひかる家並や能登瓦

夕映えにふゆる秋津の列をなす

兵庫 櫻木 道代

兵庫 国永 靖子

東京 片野 光子

愛媛 高橋 英子

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 十五句 岡田 章子 //

*選句は全て 品川鈴子

噴水の仕切り直して丈くらへ

横内かよこ

噴水の立ち上がりをしばらく見ていると、てんでに気紛れな噴き方で高さも不揃い。かと思えば、次ぎには見事に息を合わせ、一斉に高々と噴きあげて、さながら水柱の丈を比べている様子。それは相撲で気の合わぬ立合いに、仕切りの遣り直しと似ている。水にも意志があるのかもしれない。

向ひ家の若き抱擁青すだれ

村田とくみ

お向かいの真新しい簾の奥にも灯の点る頃。徒然に・見るともなく目を移すと、抱き合う若い男女の熱烈な姿をふいに垣間見る。それは青簾のスクリーンにくつきり透けて、名画のひとつまのように幻想的。若さの醸す情炎は嫌味のない影絵でもあろうか。

稲妻の度に目を閉じ南無阿弥陀

林 美智

稲の稔る頃は、しばしば空中電気の放電で火花が閃き、屈折して見えるのが稲妻。光る度に目を固く瞑るが、年甲斐もなく怖くて堪らない、思わず知らず仏の名号を唱えて継る他愛無さ。普段の頑固さは何処へやら、意外な泣きどころをさらけ出した。

稲を刈る課外授業の子ら嬉々と

森山八重子

何やら外が賑やかだと思つたら、生徒達が稲刈をしている。何もかも機械におまかせの時代であるから、恐らく鎌を持つのは初体験の子達であろう。額に汗しての共同作業が楽しそう。つい子供の頃の勤労奉仕を思い出してしまった。秋空の下、子供達の元気な声が響いている。

仏前の狭さ気にせずカサブランカ

松本 アイ

あまりの見事さにお供えにしようとカサブランカを買つ

て来たのだが、近頃のコンパクトな仏壇は、この大輪の花だけで一杯。しかも次々と開くのである。亡き人への思いに浸り、百合の甘い香りに包まれている。

瓦屋の廃業久し草の花

高橋 英子

後継者がいなくなつたのか、或いは大手の業者に委ねたのか……かつての建築ブームでは焼き上がった瓦を天日に干したり、出荷前の瓦が積んであつたりして活気があつた場所も、使われなくなつた今は草の茂るまま。懐かしい職業が一つ又一つ減つていくのは寂しい。

青蜜柑句座に暫しの静寂あり

国永 靖子

どなたが持つて来て下さつたのか句会の席に青蜜柑が配られている。選句が終わつてほつとした一人が、皮を剥くとパツと香りが広がる。それをきつかけに次々と手が伸び、部屋中に甘酸っぱい匂いが充滿する。まだ皆無言。和やかな句座が想像される句です。

秋つばめ品川宿を旅立ちぬ

片野 光子

品川は東海道の最初の宿場町として栄えた所。見送りの

人々がここ迄は付いて来たり、出迎えたり、江戸の玄関として賑わつていた。古くからの神社や寺も多く、町並みの電柱には旧東海道の文字があり、昔の街道が偲ばれる。その品川宿から今燕が旅立つて行く。品川の今昔を考えさせられる作品。

秋天にひかる家並や能登瓦

櫻木 道代

石川県の能登地方や富山県の砺波地方では黒い光沢のある屋根瓦が使われ、美しい町並みが見られます。北陸の気象条件に合つた耐寒性のある能登瓦は、山陰の石州瓦同様耐久性、耐塩害性にも優れているそうです。秋晴れのひかる家並みの下では、冬仕度に余念のない人々の生活があることが連想されます。

脈搏と熊蟬きそふ登り坂

渡邊 米子

熊蟬がシャーシャーと喧しく鳴き立てる坂道。汗を拭きながら息を弾ませて登つて行く。身体の中からは、自分だけに聞こえるドキドキという早鐘のような鼓動。外の熊蟬の鳴き声と合わさつてリズムカルに響く。(以下略)